

主体的な学習活動への取り組み — 介護技術に小グループによる課題学習を取り入れて —

丸山 順子 南原 友枝
Jyunko MARUYAMA Tomoe MINAMIHARA

百瀬 ちどり 中村 由佳 高野 晃伸
Chidori MOMOSE Yuka NAKAMURA Terunobu TAKANO

<Abstract>

The purpose of this study was to confirm that the subject learning activities in these two years were really subjective for students and to clarify the tasks that lie ahead.

They studied in the following way:

The students were divided into several groups and decided subjects and details of learning. Then they studied in the small groups, made a presentation and evaluated themselves and others about the process of the study. They did activities in the same groups as usual in 2002, but they formed themselves in groups according to the theme of the study in 2003.

The result were as follows:

- (1) In the self-evaluation, over 70% of the students highly estimated the following items:
their interest in the theme, contents of learning, usefulness of the study for the future, as well as originality and ingenuity, burden of the study, exercise for the presentation and their attitude at the presentation.
- (2) In the free text, more positive comments were made by those who formed groups by the learning subjects. Many of them wrote that they could cooperate each other within a group and enjoyed themselves.

1. はじめに

大学審議会答申では、平成9年に「高等教育の一層の改善について」の中で、高等教育の単に専門分野における高度な知識・技術を習得するのみでなく、主体的に変化に対応し得る幅広い視野や総合的な判断力や豊かな創造性を持つ人材の養成が求められているとある。また、平成12年には、「グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について」にも、「・・・学術的・複合的視点にたつて、自らの課題を探求し、論理的に物事をとらえ、自らの主張を的確に表現しつつ行動していくことができる能力」を求めている。

介護の現場においても幅広い視野や総合的な判断力が必要であり、学生は、教授されるばかりではなく、主体的に授業や課題に取り組めることが望ましい。私達は、介護技術のカリキュラムの中に小グループによる課題学習を導入して4年が経過した。課題学習を介護技術の集大成として①諸技術の統合や個別化を図る②対象に合わせた態度・言葉づかいや介護指導ができる③小グ

グループ学習を通して受動的な態度から主体的な態度への変容をはかることを「学習目的」として取り組んだ。

そこで、本研究は、ここ2年間でこの課題学習が学生にとって主体的な学習であったのかを探り、今後の課題を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

1) 研究期間；①H14年度 H14.12.4～H15.1.10（グループワーク；6コマ、発表；2コマ）

②H15年度 H15.11.18～H15.12.19（グループワーク；6コマ、発表；3コマ）

2) 課題学習の進め方

①オリエンテーション（課題学習の動機づけ）→②グループ毎テーマ、内容、対象を決める→③グループ活動（メンバー 3～8名）→④発表（1グループ 10分）

尚、H14年度では、グループは、学内演習のグループで行った。H15年度では、自分の学習したいテーマ別にグループ編成した。

3) 評価方法

(1) 発表会時に他グループの評価をする。（内容；「発表内容」「創意工夫」「発表態度」

「メンバーの参加」を「よい」「まあまあよい」「普通」「やや劣る」「劣る」の5段階評価した。その他、学んだことを記述する）

(2) 発表会後に自己評価をする。（内容；「テーマへの興味」「学習内容の充実」「今後への役立ち」「創意工夫」「学習への参加」「学習の負担」「発表会への練習」「発表会時の態度」の良否を「思う」「まあまあ思う」「あまり思わない」「思わない」の4段階評価した。その他、良かった点、悪かった点を自由記載した。）

3. 結果

グループワークは、H14年度では授業で実習をしているグループで編成した。各グループ4人から5人の2講座26グループに分かれた。H15年度では自分の行いたいテーマを第二希望まで提出し、第一希望を中心に学生同士の話し合いのもとグループを編成した。各グループは3人から8人の2講座23グループに分かれた。テーマについては、初回に各グループで決定した（表1）。課題学習の導入として、学生に課題学習を介護技術の集大成として①諸技術の統合や個別化を図る②対象に合わせた態度・言葉づかいや介護指導ができる③小グループ学習を通して受動的な態度から主体的な態度への変容をはかることを「目的」とすることを説明した。また、課題の内容は、講義の内容に留まらないこと、自分たちが興味のあることや学習してみたい内容に取り組んでみるのも良いことを説明した。同時に、対象者を決めた。重複するテーマのグループに対しては、グループ間で調整した。2時間目からは、発表に向けてのグループワークを行った。教員は、毎時間1～2名で各グループの進行状況の把握や助言を行った。発表形式は、模造紙、資料配布、実物の提示、OHP、ロールプレイ等様々であった。

アンケートの回収率は他グループの評価では、88.3%（H14）95.9%（H15）、自己評価では、89.3%（H14）97.0%（H15）であった。他グループの評価については、平均値から各項目5段階評価のうち普通以上であったが、各項目毎最高値と最低値にはかなりの有意差があった。自己評価は、各項目に「思う」「まあまあ思う」と回答した割合は、「テーマへの興味」「学習内容の充実」「今後への役立ち」「創意工夫」「学習への参加」「学習の負担」「発表会への練習」はいずれ

も70%以上であった。特に、テーマへの興味、今後に役立つ内容、学習への参加は、90%を超えた(表2、図1)。各項目毎にH14年度、H15年度で検定したところテーマへの興味について、発表会の練習に有意差がみられた。

自由筆記は、良かった点、悪かった点を自由記載した。良かった点では、「仲間・協力・チームワーク」「研究心・探究心」「学習の深まり」「表現力」等が出され、悪かった点では、「メンバー間の連携」「発表方法」「準備段階」等に問題があったと出された(表3、4)。

課題学習の進め方については、H15年度ではインターネットでの検索90.6%、図書館利用45.8%で、介護用品の取り扱いしている店へ行ったが5.2%、その他が7.3%であった。これらの方法のほかH14年度では、車椅子で実際にバスに乗って松本城に行ったグループもある。

課題学習の時間については、H15年度では「ほぼ良かった」が58.3%、「短かった」が39.6%。「短かった」と回答した学生のうちあと2時間欲しいが、42.9%あった。

表1 発表のテーマと対象

<H14年度>

テ ー マ	対 象
徘徊する人の援助方法、車椅子の基礎知識、在宅におけるターミナルケア、施設におけるリハビリテーション・レクリエーション、最新の福祉機器の紹介、誤嚥しやすい方への食事介助、誤嚥の予防と対処方法、安眠の援助、一人暮らしの片麻痺のある高齢者の住居の環境整備、おむつの種類、在宅一人暮らしをしている高血圧の方の食事援助、痴呆老人への食事援助、下半身麻痺の方の家族での楽しい外出、痴呆高齢者の身体拘束について、言語障害の人とのコミュニケーション、高齢者の万病に効く足ツボ刺激法、褥瘡予防(2)、褥瘡になり易い高齢者と好発部位、褥瘡予防器具の紹介、食事に用いる自助具の紹介、失禁の介護、尿失禁の種類と予防対策、左片麻痺の方のベッドから車椅子の移乗方法、片麻痺の方のポータブルトイレへの移動、言語障害の人とのコミュニケーション	在宅の介護者(10)、 介護福祉学生(6) 利用者(3)、 地域住民(3) 老健退所予定家族、 施設職員、老人クラブ、 在宅の介護者と利用者

<H15年度>

テ ー マ	対 象
快適な睡眠、日本の住環境の課題、福祉用具-車椅子の種類-、服を着る時に使う福祉用具、褥瘡予防に使える福祉用具、安楽-マッサージの効果、ターミナルケア-介護福祉士が支えられること、痴呆による徘徊について、誤嚥しやすい食事と誤嚥した時の対応、高血圧症の方の食事、最新の移動福祉機器について、高齢者向けの住宅改修について、手足のツボ・マッサージ、施設のリハビリ、糖尿病について-食生活で予防する-、おむつの種類、口腔ケア、褥瘡予防の器具について、利用者・家族を支えるターミナルケア、施設のターミナルケア、痴呆による徘徊について	在宅の介護者、職員 在宅の介護者と利用者 地域住民、介護学生 新人介護職員、高齢者

表2 課題学習自己評価-項目別効果的評価率-

思う、まあまあ思う	テーマ	内容	今後	工夫	参加	負担	練習	態度
H14年度	92.4	93.5	97.8	73.9	93.5	34.8	45.7	91.3
H15年度	96.9	87.5	96.9	74.0	91.7	25.0	31.3	91.7
有意差	*						*	

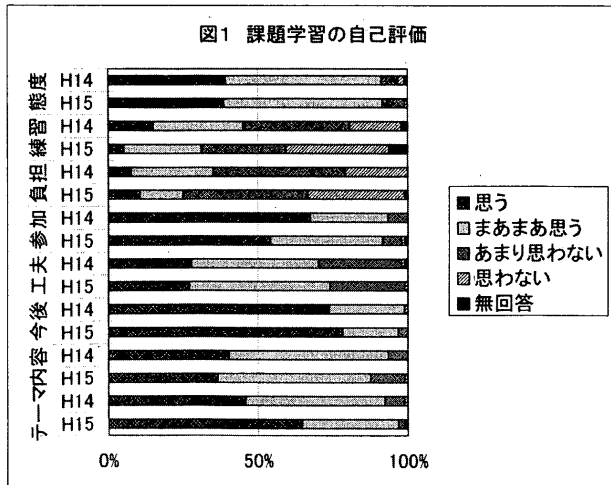


表3 課題学習に対する自己評価 (自由記載分) -H14年度-

課題学習の良かった点

カテゴリー	良かった点	
学習の深まり	・ 今後に役立つことがたくさんあった。	11
	・ 授業よりくわしく調べられた。	10
	・ 一分野について、何グループが詳しく調べていたので参考になった。	5
	・ くわしく知ることができた。	5
	・ 勉強になった。	4
	・ 他のグループの発表に興味をもてた。	3
	・ 授業でできないような応用も学べた。	3
	・ よい機会となった。	2
	・ 必要なこと以外いろんな知識を身につけられた。	
	・ 幅広い範囲の学習ができた。	
	・ 授業内容の復習もできた。	
	・ いろんな人の考えも知ることができた。	
	・ 授業でわからないところがわかった。	
	・ これからもっと問題になることを調べられてよかった。	
・ どのグループも内容が異なり勉強になった。		
・ 授業であまり取り上げられないところが調べられた。		
・ たくさんの意見が聞けてよい。		
・ 調べたことで、よく理解できた。		
・ 全体によく調べてあってよかった。		
・ 興味のあることだけにがんばってできた。		
研究心・探究心	・ 知らないことがあり学習できた。	9
	・ 興味のあることを調べることができた。	9
	・ 新しいことを知ることができた。	7
	・ 自分たちで調べることができよかった。	3
	・ 資料が集めやすかった。	
	・ 調べる習慣をつけていきたい	
	・ いろんなことに興味が出てきた。	
・ 今後、もっと学習していきたいことがみつかった。		
仲間・協力 チームワーク	・ 皆が協力して取り組むことができた。	3
	・ チームワークよくできた。	3
	・ グループメンバーと協力して準備ができた。	2
	・ どのグループも真剣に取り組んでいた。	2
	・ グループ毎の特徴が出ていた。	
	・ グループ全員で発表ができた。	
・ グループで協力し合うことがよいと思った。		

表現力	<ul style="list-style-type: none"> ・普段あまり話すことがない人と仲良くなることができた。 ・実演もあり、わかりやすかった。 ・発表時にどのようにすればよいかわかってきた。 ・資料が時間内にできた。 ・自分たちで課題を決めて、自由に発表ができた。 ・実際に行ったことによって、改善点が見つかった。 ・寸劇やOHPの発表がよかった。 	2
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しくできた。 ・積極的に取り組めた。 ・プリントの資料は、手元に残るので今後役立つ。 ・グループ学習は、余りないのでやってもよい。 ・何とか出来てよかった。 	4 2 2 2

課題学習の悪かった点

カテゴリー	悪かった点	
準備段階	<ul style="list-style-type: none"> ・手際が悪かった。 ・資料が不足していた。 ・発表や内容に創意工夫が足りなかった。 ・自ら何もしなくて終わってしまった。 ・対象者の説明するには、専門的過ぎてしまった。 ・深く調べることができなかった。 ・インターネットばかりに頼ってしまった。 ・あまりできずに心残りである。 ・時間が欲しかった。 ・調べるのは大変 ・知識不足を実感した。 ・冬休みがあったので、班のメンバーとできなかった。 	3 2 2
発表方法	<ul style="list-style-type: none"> ・時間が足りなかった ・発表の練習ができなかった。 ・時間が限られていて忙しかった。 ・模造紙での発表は、前の席しか見えない。 ・マイクで発表するだけのグループがいて、実演するとよい。 ・事前の打ち合わせと違う発表になってしまった。 ・資料のないグループは、わかりにくかった。 ・発表時、うまく説明ができなかった。 ・資料のみの班では、時間が余ったところがある。 ・発表するとき、早口になってしまった。 ・発表時の要領が悪い。 ・見ている人に興味を持てるような発表内容の検討が必要。 ・発表時間を長くして欲しい。 ・発表方法を決めてくれた方がやりやすい。 	9 7 5 2 2
メンバー間の連携	<ul style="list-style-type: none"> ・人任せで何もしないメンバーがいた。 ・メンバーが分裂してしまった。 ・メンバーが打ち解けず、思ったことが言えなかったり、イライラした。 ・仲間意識が強くなった。 ・グループワークにもっと積極的に取り組んでいきたい ・ただ授業を受けているだけでなく、自分たちで調べるのもよいと思った。 ・人数が多くなることで、参加しない人もいた。 	5
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・発表日にメンバーが全員そろわなく残念だった。 ・他の教科とグループ学習が重なって大変だった。 ・グループによって発表内容の差があった。 ・発表するのが嫌だった。 ・質問が少なかった。 ・グループ学習は嫌い。 	2

表4 課題学習に対する自己評価（自由記載分）－H15年度－

カテゴリー	良かった点	
学習の深まり 研究心・探究心	・自分で興味があること、知りたかったことを学習することができた	22
	・新たな学習ができた。	2
	・詳しく調べることができた	8
	・授業ではふれられないくわしいことの知識を得た	7
	・自分で調べた分勉強になった	5
	・今後役立つことをが学習できた	4
	・自分で調べたので理解できた	4
	・自分で調べていく段階でおもしろくなった	3
	・インターネットでの情報が十分あった	3
	・充実した発表ができた	
仲間・協力 チームワーク	・メンバーが協力してできた	21
	・グループ内のディスカッションが盛んにできた	6
	・グループ内の人間関係がより良くなった	4
	・ふだんあまり知らない人を知る機会になった	2
	・グループ内の意識がまとまった	2
	・興味のある人達で集まったので協力できた	2
	・積極的に参加できた	
	・自分とは違う考えを知ることができた	
表現力	・他のグループが様々な工夫をされていた	2
	・発表で人前に立つことで慣れていく	
その他	・楽しくできた	14
	・取り組んでよかった	9
	・他グループの発表が楽しかった	6
	・また行いたい	3
	・おもしろかった	2
	・評価されてうれしかった	2
	・もっといろいろのことが知りたい	
	・自分達に関心をもったテーマについて真剣に聞いてくれた	

カテゴリー	悪かった点	
準備段階	・時間が足りなかった	14
	・時間的に余裕なく深く調べられなかった	2
	・取りかかりを早くすればよかった	
	・言葉一つ一つの意味を深く追求できなかった	
発表方法	・発表に工夫が必要だった	2
	・対象者を意識したはっぴょうにならなかった	
	・資料を読むだけだった	
	・発表時間が短かった	
	・発表時器具の使い方がわからなかった	
	・発表するのは苦手	
	・発表する機会が多すぎる（他教科も合わせて）	
学習不足 工夫不足	・もっとくわしく調べたかった	5
	・インターネットの情報をそのまま載せなので工夫が必要	3
	・資料があまりない	3
	・調べるのにインターネットのみとなってしまった	2
	・まとめが十分できなかった	
	・インターネットの活用が不十分だった	
	・資料が読めなかった	
メンバー間の 連携	・協力しない人がいた	7
	・積極的に参加できなかった	2
	・役割分担が不平等	2

その他	・まとまりがなかった ・聴く態度が悪かった ・一人の負担が大きかった ・意見があまりでなかった ・メンバー全員が集まるのに苦労した ・仲の良い人同士だと馴れあってしまう ・自分の意見が聞き入れてもらえなかった	5
	・自分が主体になってしまった ・他教科と課題が重なり負担だった ・めんどろであった	2

4. 考察

介護技術の授業展開は、その内容が多いため教授することが多く、各単元で学生が主体的に考え探求していく余裕はないのが現状である。また、単元ごとの授業展開をしていくと各技術の理解はできても、対象者に即した援助に必要な技術の統合・個別化などには、なかなか到達できない。そこで、施設実習の前に技術の統合・個別化や学生の主体的な学習を促すことが必要であると考え、「目的」を提示し、課題学習を取り入れた。H15年度まで4回行った。初年度から2年間はテーマを教員側から提示し、授業のグループで話し合い割りふった。これでは、学生の主体性に欠けるという反省より、H14年度ではグループで自由なテーマを決めて取り組んだ。そして、H15年度では、個人の主体性を高めるために自分で取り組みたいテーマを決め、共通したテーマの学生同志でグループを編成した。

自己評価の結果から、「テーマへの興味」「学習内容の充実」「今後への役立ち」「創意工夫」「学習への参加」「学習の負担」「発表会時の態度」の項目とも約70%以上が「思う」「まあまあ思う」と効果的にとらえていた。特に「テーマへの興味」「今後に役立つ内容」「学習への参加」は、90%を超えほとんどの学生が「思う」「まあまあ思う」と効果的にとらえていた。自己評価の自由記載から、H14年度は、興味のあることを調べることができた、知らないことがあり学習できた、今後に役立つことがたくさんあったなどの記載があった。H15年度では、これらの内容について自由記載した学生が2倍に増えていた。さらに、メンバーが協力してできた、楽しくできた、取り組んでよかった、また行いたい、他グループの発表が楽しかったなどの記載が多かった。一方、課題学習への負担は、H14・15年度とも約25%に負担感があり、テーマを選んだからといって負担感に変わりはない。課題学習への負担の内容は、発表自体が嫌いというもので、両年度とも人間関係で嫌だったというのは全体で約5%と少なかった。

これらのことにより、今回の学生の主観的なアンケート結果から学生の興味や探究心から取り組んだこの課題学習は、主体的な学習を促し、学習の深まりや研究心・探究心を育て、今後に役立つ気持ちを発生させた。また、メンバーとの協力のもとに課題学習が楽しくでき、今後も行ってみいたいという気持ちも発生させた。

また、対象を設定したことで、学生が、対象者が理解しやすい内容・言葉づかいを意識して発表することができた。学生にとって、表現力の向上にも効果的であったと考えられる。課題学習の内容については、インターネット90.6%、図書館45.8%がほとんどで、インターネットに頼り十分な検討をせずに発表するグループが多かった。現代は、インターネットによって簡単に情報を得ることができる。しかし、それにとどまらず介護用品を取り扱っている店や実際の現場などに行くなどアクティブかつ多面的に学習することが望まれる。課題学習の時間については、約4割

が不足していたと答えている。そのうち、あと2時間ぐらいが全体の約42.9%であった。発表会の練習については、約60%~70%の学生が出来ていないことにより、今の時間では、学習し資料を作るのが精一杯で、発表をどのように行うかの練習時間がないことがうかがえる。

さらに、グループ活動により、自分と考えが違う他者を知り、仲間との連携を育てる機会を得た。特にH14年度では、学内演習のグループで行ったため、メンバー間でテーマを決める段階や興味をもって取り組んでいくまでの段階で苦心した体験をした。H15年度では、自分の希望したテーマでメンバー編成したために、ディスカッションが盛んにでき、協力して楽しく学習した体験ができた。一方、両年度とも少数ではあるがグループ内に協力しない人がいて苦心した体験もした。この課題学習から、介護していくにあたり一つの課題を探求するためにはチーム間の連携がいかに必要なことが体験できた。これは、このような課題学習が「自己評価を行う、自主的な、相互依存的な、小グループによるPBL (Problem-based learning)」によれば、グループワークの過程でグループからチームに成長し、課題解決が「私は」が「私達は」に発展していくことやチームづくりが意欲を増大し、より多くの義務と権利が与えられ、チームメンバーという責任も増大することの効果が述べられている。これらにより課題学習がグループ内での自分の役割り、メンバーとの連携を育て、課題を探求する力を得た。さらに、H15年度のようにグループ活動を通して、やりがいや楽しさ、学習の面白さを自ら経験することにより、今までの受動的な学習から、主体的に学習をしていくことを快い体験をしていくことも必要だと考える。

5. まとめ

今まで取り組んできた課題学習は、学生の主観的観点から次のような学習効果が得られた。

- ①学生の興味や探究心から発生したこの課題学習は、主体的な学習を促し、学習の深まりや研究心・探究心を育て、今後役に立てる気持ちを発生させた。また、メンバーとの協力のもとに課題学習が、やりがいや楽しさ、学習の面白さという気持ちも発生させた。
- ②対象を設定したことで、学生が、対象者が理解しやすい内容・言葉づかいを意識して発表することができた。学生にとって、表現力の向上にも効果的であったと考えられる。
- ③グループ活動により、自分と考えが違う他者を知り、グループ内の自分の役割を自覚し、仲間との連携を育てる機会を得た。
- ④インターネットからの情報に頼りすぎ、十分な検討をせずに発表する傾向にあった。

以上、自分の興味のある分野でグループ活動を通して、やりがいや楽しさ、学習の面白さを自ら経験することにより、今までの受動的な学習から、主体的に学習をしていくことを快いで体験していくことも必要だと考えられた。

これまでの結果をもとに、さらに効果的に学生が主体的に課題研究に取り組めるために教員側の今後の課題として、次のことが挙げられた。

- ①グループ活動の時間を効果的・計画的に行えるように配慮していく。
- ②グループのメンバー構成・人数を調整し、グループからチームに成長できるように配慮していく。
- ③主体的な学習への効果についての客観的な評価について探求していく。
- ④課題学習の内容の充実への助言をしていく。

6. おわりに

大学教育は、単に専門分野における高度な知識・技術を習得するのみでなく、主体的に変化に対応し得る幅広い視野や総合的な判断力や豊かな創造性を持つ人材の養成が求められている。そのために私達は、学生の現状を踏まえ、教育方法の工夫を行い研鑽していく必要性を改めて認識した。また、主体的な態度についての客観的な評価が難しく、今後さらなる検討を重ね客観的な評価を確立していく必要性を感じた。

7. 参考文献

ドナルドR. ウッズ 新道幸恵訳；「PBL (Problem-based learning) 判断能力を高める主体的学習」；2001